

## 1999年ヨーロッパ日食旅行記

69MA 石塚敏晴

1999年ヨーロッパ日食、どこで観るか？ イギリス南部、フランス、オーストリア・・・地図を広げて悩むこと半年。よし行った事の無いオーストリアはザルツブルグだ、音楽祭で有名だしもう賭けにも似た気分で決定。たいした理由は無い。

「前世はフランス人だったかも」とのたまう妻は大のヨーロッパ好きで、1ヶ月のベルギー滞在を早々と決めていた。8月5日から11日間の盆休みをとった私をブリュッセルの空港で出迎えるという筋書きまで整えて。

シナリオ通り、8月5日の午後9時ブリュッセルの空港に降り立つとフランス人にはとても見えない妻が、もう10年もいたような顔をして手を振っていた。滞在先のコンドミニウムへは国鉄とトラム（路面電車）を乗り継いで到着。時計は午後10時を回っていたが、夏の夜はまだ薄明かりを残していた。なぜかキューリのQちゃんをつまみながら冷えたベルギービールを飲む・・・ウーーン本場のビールは美味しい！！

翌日は朝早くから、近くの森を散歩した跡、王宮博物館を覗きグランパレスへ。古い石造りの町並みがヨーロッパの歴史を感じさせる。市内はトラムが発達していて、大体何処へでもいける。そのトラムで今度はトレビューンの公園へ行きアフリカ博物館を見学。

7日は早朝より列車でオランダのアムステルダムへ。目的のゴッホ美術館はもうすでに行列だった。昼食後国立博物館へ行き、レンブラントの夜警とフェルメールなどの絵を見る。夜警はアハハと笑うほどでかかった。トラムで移動し次は運河沿いのアンネ・フランクの家へ。運河では何かの祭りらしく、趣向を凝らした船が次々と大音響で音楽を鳴らしながら踊ったり跳ねたり跳んだり賑やかな人たちを乗せて通り過ぎていく。

8日はブリュージュへ行くがあいにくの雨模様。何とか言う塔に登るが、普段の運動不足がたたってへばりぎみ。ブリュージュからさらにバスでダームの街へ。ここは何の気なしに来たんだが、来て良かった、感激、絶対お勧めのポイント。

9日、ウィーン目指してよいよ移動開始。ウィーンの空港から電車で市中心部へ。途中「第3の男」の舞台となった所を通過する。確かレコードのジャケットの写真にあった並木があった当たりだと思うけど、あるいはお墓だったかな。ウィーンは中島君に予約してもらった松前ホテルに直行する、つもりであったが、電車でのホテルへの行き方が分からない。タクシーで行くなんて絶対いやだから駅員に聞いたり、行きずりの人に聞いたりでやっつの思いで到着。いやー、遠いこと。

10日、ザルツブルグに列車で移動。車窓からの景色はテレビ朝日でやっている「世界の車窓から」なんか思い出したりする景色にそっくりだ。ザルツブルグはホテルなんか予約していなかったので探すのが大変だった。ほぼ1ヶ月の間、ザルツブルグ音楽祭なんかもやっていてホテルが全然空いてない。妻が得意の(?)英語でインフォメーションセンターの係員と丁丁発止のやり取りの末やっと一部屋確保したがバカ高い。でも野宿よりはまし。ホテルで一休みして街に出るが生憎の雨で傘の波。しかし夕方になると嘘のように晴れあがって明日に期待を抱かせる。

いよいよ当日。少々雲もあるがまずまずのお天気。最終目的地のザンクトウォルフガングへ9:50発のバートイシル行きバスに乗る。なにせ1時間に1本のバスだから乗り遅れないようにやや早めに着いたけど、駅前のバスターミナルが工事中で乗り場が何処かわからない。あれやこれやでようやくバスに乗ったのが発車間際。やれやれと一息ついてると、今度は雲行きがだんだん怪しくなってきた。雲が全天の半分くらいに増えているではないか。バスの車窓からいらいらしながら眺めていると、眼前にザンクトウォルフガングの街と湖が突然のように現れた。絶景!途中でバスを乗り換えて湖畔に到着。湖畔の一番よさそうなところはすでにかかりの人込み。日食を見ることに重点を置いている私は、特に観測機材なるものは持っていかず、三脚とカメラ程度の軽装備。

とにかく場所を確保して日食の瞬間を待つことに。まつことしばし、雲がだんだん増えてくる、ついに全天雲だらけ、あーえらいこっちゃ。後5分、4分、3分・・・、当りは急速に暗くなりついに皆既。雲を通してどうにか日食が分かる程度の結果に終わってしまった。残念。とそのとき、雲の間からなにやら舞い降りてくるものを発見。飛行機から飛び降りたパラシュートだった。発煙筒のような物を焚いている。これも演出か。

日食は見られなかったが、ま、しょうがない。よし次は登山電車に乗ってサウンドオブミュージックの舞台になったお花畑でも見に行くとするか。てなこと登山電車に乗ること1時間あまり。ホントにサウンドオブミュージックの場面だった。切り立つ山々、眼下に広がる湖、その周りに並ぶおもちゃのような家々、咲き誇る高山植物の花々、なんと表現していいのか、ま、百聞は一見にしかづで行ってみることだ。

おっとそうだ、今日は越智さんと夕方ミュンヘンで会う約束をしていたんだっけ。いつまでもいたい気持ちに別れをつけミュンヘンへ向かうことに。ところがバスの便が悪くウィーンに着いたのが夕方5時過ぎ、それから列車がまた無くてミュンヘンに着いたのは夜8時を回っていた。ミュンヘンで越智さんに電話をしたが、すでに疲れてお休みだったようで日本に帰ったら会おうということになった。

今夜の宿は何も予約していないし、何処に泊まるかも考えていなかった。ホテルを探すの

も面倒と夜行列車でケルンに向かうことにした。ところがこの夜行列車が超満員、座る場所もないくらいの混雑ぶり。いやー参ったね、と妻と 2 人窓際に立っていると、車掌が検札にきて中のコンパートメントに 2 人分の空きがあるから指定券を持った人が来るまで座っていていいよと言ってくれた。おーラッキー。ケルンまでついに誰も来なかったのでゆっくり眠ることができた。だけどあの混雑した車内を人込みをかき分けシェパードの大型犬と、でっかいベビーバス（何に使うんだろうか？）を持ち込んできた（若い）女性にはビックリした。なんとなく思い出に残る光景であった。

次の朝早く列車はケルンに到着。駅前の大聖堂を見た後、昨日の日食写真が載っているスポーツ紙（ドイツ語なので何が書いてあるか分からない）を買う。新聞を見ながらライン下りならぬライン上りでボンへ 2 時間の船旅は日本とは全然違う光景に時間のたつのも忘れて見とれていた。ヨーロッパは何処を見てもいいところばかりだ。ボンではベートーベンの生家を見て列車で再びブリュッセルに戻る。

13 日、明日は帰国なので今日が最後。よし今日は Lier と Antwerp へ行こう。そう決めてまず Lier へ行く。ここにはあの有名なジンメルの時計があるのだ。何の変哲も無い小さな街だけどやっぱりいいんだな街の作りが。ジンメルの時計も面白かったしなー。

夜、ブリュージュの近くのオイドンク城でオペラ「カルメン」があるというので見に行くことになった。夜は相当冷えるから毛皮を持っていったほうがいいと言うのが半信半疑ながら厚手のセーターなどを借りて行った。やはり相当冷え込んでセーターだけでは寒かった。まだ昼はTシャツ 1 枚でも暑いくらいの 8 月半ばだと言うのに。オペラは言葉がわからなくてこんなもんかって言う程度の感想しかなかった。でも 9 時から始まって終わるのが夜中の 1 時って言うのもすごいよね。日本じゃ考えられないね。

短い 10 日余りの旅も今日が最後。肝心の日食が観られなかったのは残念だけど、心に残る旅だった。そういえばザルツブルグの駅であった老夫婦、ブタペストへの行き方が分からないから駅員に聞いてくれといていたが無事にたどり着いたのだろうか。ホテルが取れないと言っていた 2 人ずれの日本人の若い娘たちはどうしたんだろう。思い起こすとまだまだ書ききれないことばかりだ。

そうだ 2006 年はトルコに行くんだ。イスタンブールは 17 年前に仕事で行ったけどずいぶん変わってるだろうな。羊の脳みそはまだ食べてるんだろうか。ベリーダンスはまだやってるのかな。なつかしいな、それじゃ 4 年後、再会。



ウィーン



ザンクトウォルフガング湖畔



11 12:39

皆既中



11 12:49

皆既中の演出？



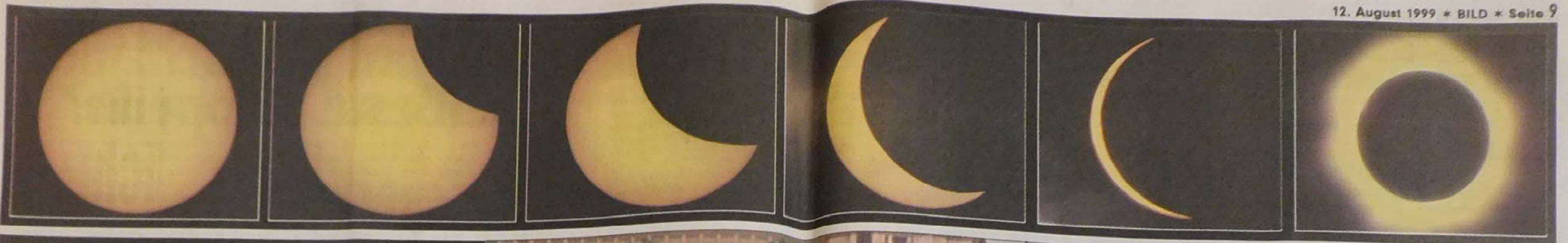
ザンクトウォルフガング頂上



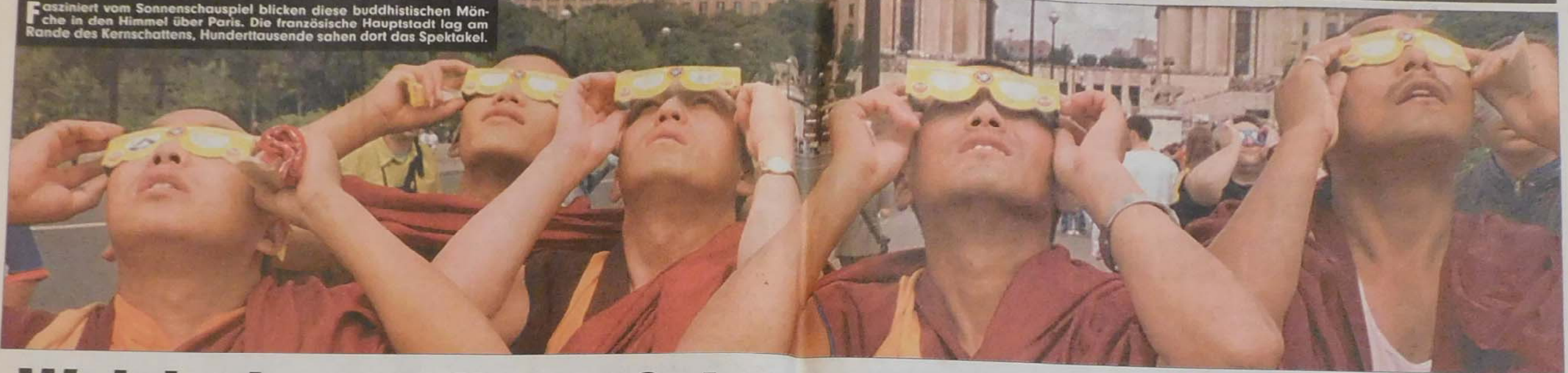
ケルンの大聖堂



ジンメルの時計



Fasziniert vom Sonnenschauspiel blicken diese buddhistischen Mönche in den Himmel über Paris. Die französische Hauptstadt lag am Rande des Kernschattens, Hunderttausende sahen dort das Spektakel.



# Welch ein grandioses Schauspiel! Pünktlich riss die Wolkendecke auf

Fortsetzung von Seite 1

**Ganz Deutschland im Bann der schwarzen Sonne - ein erhebendes, ein überwältigendes Schauspiel!**

Und vielerorts Ausnahmezustand: Autofahrer stopten mitten auf der Autobahn, Richter unterbrachen ihre Verhandlung. Und Hunderte Menschen mussten mit Prellungen oder sogar Knochenbrüchen in die Klinik - böse Fehlritte wegen der Schutzbrillen.

**Karlsruhe:** 500 000 Menschen jubelten wie mit einer Stimme auf, als sich die Korona für zwei Minuten zwischen den Wolken zeigte. Die ganze Stadt in Party-Stimmung, viele mit Sektflaschen unterwegs.

**München:** 45 000 im Olympia-Stadion. Wie bei einem Schlagerspiel des FC Bayern. Ministerpräsident Edmund Stoiber (CSU) erklärte tief bewegt: „Bei so einem außergewöhnlichen Ereignis wird einem die eigene kleine Existenz erst richtig bewusst!“



Beschwor den berühmten Zauberer Merlin zur Sonnenfinsternis: ein Drüde im englischen Cornwall. Hier wurde der Tag um 12.20 Uhr zur Nacht.

**Merkwürdig:** Während der totalen Finsternis kam offenbar kein einziges Baby in Deutschland zur Welt.

Erst mit den neuen Lichtstrahlen drängten die Suglinge auf die Welt. Ein Satz: „Sie purzelten wie am Schnürchen heraus.“

Auf den Autobahnen und Straßen rund um Stuttgart: raus bis zu 45 Kilometer Länge, alle Parkplätze und Wiesen dicht belagert. Alle 40 000 Hotelbetten in Stuttgart ausgeleuchtet. Auf dem Schlossplatz: 300 000 Menschen im Regen. Aber keiner konnte seinen Regenschirm auf - nur ja nichts an diesem einzigartigen Himmelschauspiel verpassen... Ein kleines Wunder erlebten 3000 Sofi-Gucke in Oberpfaffenhofen: Sie sahen dort totalen Sonnenfinsternis riss die Wolkendecke auf - und wie auf Kommando kein Tropfen Regen mehr.

**Alarm bei den Augenärzten:** gestern Nachmittag die ersten Patienten mit Sehstörungen - Sofi-Gucke ohne Schutzbrille...

„Ich war der Sonne am nächsten“



BILD-Reporterin Tanja Treser

Die Wolkendecke reißt auf. Das ist 11.24 Uhr. Ich stehe auf dem sonnennächsten Punkt Deutschlands, auf der Zugspitze (2963 m). Mit noch 1000 Sofi-Fans. Die Sonne hängt wie ein fettes Vanillekipferl über mir - als wäre zu viel Butter im Teig.

12.37 Uhr. 98 Prozent Sonnenfinsternis. Mehr geht hier nicht. Es ist nicht ganz hell, die Temperatur fällt um ein Grad fast auf den Nullpunkt, mir ist unheimlich zumute. Ein Baby auf dem Arm einer Touristin kreischt herzzerreißend.

Neben mir klingelt ein Handy. Ich schaue die Frau erstaunt an, sie klärt mich auf: „Das war meine Tochter aus Mailand. Sie hat gesagt: Mama, wenn die Welt jetzt wirklich untergeht, wollte ich dir nur noch sagen, daß ich dich lieb habe.“

„Die Korona flackerte wie ein Feuerring“



BILD-Reporter Andreas Vieweg

Sonnenfinsternis-Sonderflug mit der LTU ab Düsseldorf, außer mir noch 162 Passagiere. Alle mit Schutzbrille - wir sehen aus wie Statisten aus der Science-Fiction-Serie „Star Trek“.

Steiler Steigflug bis auf 13 100 Meter. Als wir durch die Wolkendecke stoßen, hat die Sonne hat schon eine Delle. Zwischen Karlsruhe und Stuttgart wird es langsam dunkel, eine Dämmerung ohne Abendrot.

Jetzt ist die Sonnensichel kristallklar zu sehen. Sterne tauchen auf. Als der Mond ganz vor der Sonne steht, flackert die Korona wie ein Feuerring. Weit unter uns auf der Erde ist Nacht. Punktförmige, kreisrunde Nacht - drumherum heller Tag. Ganz still ist es an Bord...

„Um mich herum war Totenstille“



BILD-Reporterin Petra Erwein

Das Zentrum der Finsternis. Ich war in Saarbrücken. 12.29 Uhr, noch 18 Sekunden bis zur 100prozentigen Verdunkelung. Vom Regenhimmel Donnerrollen wie Paukenschläge - die Natur bittet um Ruhe. Ohne Übergang fällt die Nacht als dunkler Vorhang über die Stadt. Als hätte jemand das Tages-Licht ausgeknipst. Die Menschen ringsum - ganz still. Totenstill. Alle die Köpfe im Nacken, Blick zum pech-schwarzen Himmel. Keiner rührt sich mehr. Erstarrt in Ehrfurcht vor dem Himmelspektakel.

Vor mir löst sich ein Mann aus seiner Erstarrung, schützend legt er den Arm um seine Frau. PS: Nervig waren nur die, die mit ihren Pocket-Kameras in den dunklen Himmel blitzten...

## Abend Fieber in Harmonie

Abend Fieber in Harmonie... Fasziniert vom Sonnenschauspiel...

## Radka machen

Radka machen... die acht Goldkehlen des Polizeichores...

## Köln-TOP

Köln-TOP... Flughafen-Mitarbeiter...